

主イエスが天に昇られる直前に、「エルサレムを離れないで、聖霊のバプテスマを受けるのを待ちなさい」と命じられた弟子たちは、その主のおことばに聞き従いました。そして聖霊を待つ間、彼らは共に集まり、祈りに専念し、聖書から主の導きを求めたのです。そんな彼らに、いよいよ聖霊が注がれます。「聖霊があなたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」という主の約束は、そのようにして実現へと向かうのです。

1節「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた」。この五旬節とは、私たちが「ペンテコステ」とも呼ぶもので、収穫を祝うユダヤの祭のことで（レビ 23:16）。旧約聖書では「刈り入れの祭」「七週の祭」とも言われ、過越の祭から 50 日後にもたれます。ですから、聖霊は、主の十字架の出来事の 50 日後に弟子たちに臨んだということになります。

その時の様子が、続く 2-3 節です。「すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。3 また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった」。聖霊は、まず激しい風が吹いて来るような響きとして来ました。そして、それは炎のような分かれた舌として現れたとルカは表現しています。風の音というのは、普段あまり耳にしないものだと思いますが、でもそれが強風になると、私たちの耳でも聞くことができます。そのように激しい風が吹くような響きとして、聖霊は、突然、天から弟子たちのところに来たのです。

そして、彼らはそれを目で見ました。それは「炎のような分かれた舌」だったということです。この「舌」というのが何とも微妙な表現ですが、でもそれが炎のようであったということから、炎をイメージしたらわかりやすいかも知れません。いずれにしても、どうでしょう？突然、天から、激しい音とともに炎のようなものが現れたら、どんな心境になると思いますか？もちろん、誰もが驚くと思うのですが、私なら、きっと終わりの日が来たと思うでしょうね。幸いなことに、この時、弟子たちに臨んだのは、主の約束された聖霊でした。

聖霊は、そのようにして祈りとみことばをもって、自分たちに与えられるのを待っていた弟子たちの上にとどまった。そして彼らはみな、その響きを聞き、炎のような舌を目にしました。ここから言えること、それは聖霊というお方は、何か弟子たちが考えだした教えのようなものではないということです。それは彼らをして、その身をもって実際に体験できるものとして、天から与えられた神様の賜物、主自身の霊だったのです。そして、もう一つの注目点は、聖霊は「みなが一つ所に集まって」いる中で与えられたということです。

前回私たちは、共に祈ることの大切さに少し触れました。私たちが祈りを共にするには、当然、一つの所に集まる必要があります。そして、そのようにクリスチャンがともに主の御名によって集まり、そこに交わりがあるなら、それが教会です。教会とは建物ではありません。もちろん、建物を指して教会という時もありますが、その本質は「聖徒の交わり」です。ですから、弟子たちが一つ所に集まる中で聖霊が彼らに臨んだように、今日も主を信じる私たちが共に集まり、互いに愛し合うところに、聖霊は豊かに臨まれます。

ヘブ 10:25 に、このように記されています。「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますさうしようではありませんか」。健康上の問題やその他、特別な事情で集まることのできないという方もおられます。その場合には、その人のところに教会が、つまり、聖徒たちが訪問することが求められるわけですが、それ以外には、みながいっしょに集まることを率先して行う必要があります。なぜなら、主は私たちを、ご自分に属する一つのからだとして互いに仕え合うために召されたからです。

話を戻します。聖霊は、主に言われた通り、弟子たちがエルサレムを離れず、共に集まり、祈りとみことばをもってその与えられることを待ち望む中で彼らの上に注がれました。そして、彼らが聖霊に満たされた時、常識ではあり得ないことがそこで起こったのです。4節「すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しました」。

聖霊に満たされた主の弟子たちはみなガリラヤの人であったとあります。その彼らが突然、他国のことばで話し出したわけですから、まさにそれは奇蹟としか言いようがありませんでした。4-11 節の間に、そのことが4回も繰り返してきます。今の4節では「他国のことば」、6節「それぞれ自分の国のことば」、8節「私たちめいめいの国の国語」、11節「私たちのいろいろな国ことば」と。これはみな、同じことを言うわけですが、五旬節の日に聖霊を受けた結果、弟子たちは他国のことばで話すようになりました。

では、なぜそれが他国のことばだとわかったのでしょうか？もしそこにガリラヤの人しかいなかったとしたら、彼らがそれを他国のことばとして理解することはできなかつたかも知れません。答えは簡単です。あらゆる国から来ていた人たちがそこにいたからです。彼らは聖霊降臨の物音を聞いて弟子たちのいた所に集まって来ましたが、そこで弟子たちが自分たちの国のことばで話すのを聞いたのです。

人々の中には「甘いぶどう酒に酔っている」と言って弟子たちをあざけた人もいたようですが、それは彼らが他国のことばを知らなかつた可能性が大いにあります。というのも、ことばというのは知らなければ、それを正しいかどうかと判断することができません。ですから、彼らにとっては、弟子たちが語っていることばは酔っぱらいが、意味のわからないことを話しているのと同じように聞こえたのでしょうか。でも、それを自分の国のことばとして認識できた人々にとっては、それはまさに驚き以外の何ものでもありませんでした。

そこで彼らのリアクションを聖書から見ます。5-11 節「さて、エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国から来て住んでいたが、6 この物音が起こると、大ぜいの人々が集まって来た。彼らは、それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、驚きあきれてしまった。7 彼らは驚き怪しんで言った。『どうでしょう。いま話しているこの人たちは、みなガリラヤの人ではありませんか。8 それなのに、私たちめいめいの国の国語で話すのを聞くと、いったいどうしたことでしょう。9 私たちは、パルテヤ人、メジヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジヤ、10 フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者たち、また滞在中のローマ人たちで、11 ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレテ人とアラビヤ人なのに、あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは。』」。

弟子たちが他国のことばで語るのを聞いた人々のリアクション、それは驚きあきれるというものでした。皆さんは、それを聞いてどう思いますか？「えっ、なんで驚くの？」と言うのでしょうか？そんなことが起こったら、誰もが驚きます。私が学んだ東京聖書学院の教授の一人に、5ヵ国語以上を話す先生がおられました。さすがに、それを初めて聞いた時は本当に驚きました。もちろん、先生は語学を学ばれたわけですが、それでもそれは天からの賜物だというべきです。ただ弟子たちの場合は、それが聖霊降臨と共に、突然のこととして起こったのですから、人々は大いに驚いたことでしょう。弟子たち自身も驚いたと思います。

でも、ここで私たちが考えたいこと、それは「聖霊降臨の結果が、なぜ弟子たちをして他国のことばで話すことだったのか」ということです。なぜでしょう？この後、病のいやしなどの奇蹟も記されていますが、なぜいやしや他の奇蹟ではなく、他国のことばで話すことだったのでしょうか？私はここに主が弟子たちに「聖霊が臨むとき、あなたがたは、わたしの証人となります」といわれたことばの意味を見ます。弟子たちをして聖霊を受け、それに満たされる理由、それはキリストの証人となることでした。つまり、主イエスが救い主であるという確信が与えられ、信仰をもって彼に聞き従うことで、いつでも、どのような時にも主を証する者となるために聖霊は与えられたのです。

ですから、ここで「敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国から来て住んでいた」とありますが、ある先生は、この人々を「彼らは異国に住んでいる人々で、過越の祭りのためにエルサレムに来て、七週の祭り（五旬節）が終わるまでの約50日間をそこで滞在していた人々」と説明していました。つまり、神様は、主の福音が地の果てにまで及ぶために、この時、エルサレムに世界中の人々が集う中で、弟子たちに聖霊を注がれたのです。人々がキリストの福音を聞いて救われるため、そして、そこから世界宣教が始まるためです。

では、弟子たちはどんなことを語っていたのでしょうか？11節の後半「あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは」。弟子たちは他国のことばで神様の大きなみわざを語り

ました。神の大きなみわざとは何ですか？ここにはその内容が記されていないので、推測するしかないわけですが…、いかがでしょうか？もし今、弟子たちと同じように聖霊があなたにとどまり、聖霊が話せてくださるとおりに、あなたが語るとしたら、あなたはどんなことを「神の大きなみわざ」として語ると思いますか？

私なら、間違いなく、主イエスのこと、神様がこの方を通して成し遂げられた十字架の救いのわざ、そして復活のわざを語ることでしょう。そして、この方によって、いかにして自分が罪と死ののろいから解放され、永遠のいのちの力と望みに生かされる者とされたかを語ると思います。

この聖霊降臨の出来事を見る時、弟子たちが他国のことばで話だしたということにどうしても重点が置かれやすいかも知れません。なかには「そんなこと本当に起こったのだろうか？」と聖書と神様に対して疑いの目を向ける人もおられるかも知れません。私も以前は、そのようなことをよく考えていました。でも今は、主の弟子たちが、神様の大きなみわざを語ったというところに、もっと大きな驚きを覚えます。というのも、聖霊を受ける前、彼らはユダヤ人たちを恐れて隠れていたのです。そんな彼らがユダヤ人だけでなく、ローマ人もいる前で、神様の大きなみわざを彼らの国のことばで語ったのですから、下手すると、弟子たちも主と同じように十字架にかけられてもおかしくありません。

でも聖霊に満たされた時、彼らは聖霊に導かれるままに神の大きなみわざを語ったのです。この続きを見ると、ペテロは人々にこう語っています。36節「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」。弟子たちのほとんどは、やがて殉教の死を遂げていくわけですが、でも、最後まで彼らが神の大きなみわざとしてのキリストの福音を語ることはできたのは、聖霊の力としかいえません。

サタンの誘惑の一つ、それは私たちに自分の知識や能力に頼らせることで、聖霊に満たされなくても大丈夫のように思わせることです。私たちはその偽りにどれだけ騙されてきたことでしょうか？そのようにして、本当は人知を超えて遥かに大きな方を、この小さな頭で理解しきれるような小さな方にしてしまっているということはないですか？主は今日もみことばを信じ、祈りをもって聖霊の満たしを求める者に豊かに臨んで下さいます。そして、聖霊を通してキリストの栄光を現し、またその御力をもってキリストを証する者とならせて下さるのです。ともに聖霊に導かれて歩むことを切に求めようではありませんか。